

天狗とねずみ

TENGU TO NEZUMI

作・はらぐちみきろう



イラスト：菊峰志麻

むかしむかし、薩摩の国、申木野山のふもとに、白石屋という小さな焼酎蔵がありました。

申木野山には、むかしから天狗が住んでいるという言い伝えがありましたが、誰も天狗を見た人はいませんでした。

白石屋の当主はとてもまじめで、美味しい焼酎を造るのに懸命でした。焼酎造りは、自然とともに歩むことだとして、さつまいもやお米も農家さんたちと一緒に作っていました。

毎日、甕に向かっては、おいしくなれ、おいしくなれと話しながら焼酎を造っていました。

出来た焼酎は、申木野山の天狗にお供えていました。

すると、焼酎が空っぽになった瓶とまるまる残っている瓶がありました。また同じように出来た焼酎を供えると、空っぽになった瓶とまるまる残っている瓶がありました。不思議に思った当主は、空っぽになった焼酎とまるまる残った焼酎の味を比べてみると一目瞭然でした。

あらためて飲むと、当主もおいしい焼酎とそうでない焼酎に感じたのです。

それからというもの当主は、出来た焼酎を天狗にお供えし、聞き酒してもらおうとまた同じように、美味しい焼酎が選ばれたのです。

当主は、天狗に全部飲んでもらえるような焼酎を造ろうと毎日毎日寝る間も惜しんで努力したのでした。

その甲斐あつて、まるまる残る焼酎はなくなり、すべての焼酎が飲まれるようになったのです。

天狗に飲まれる焼酎は、美味しい焼酎だとたちまち有名になり、飛ぶように売れたのでした。

当主は、天狗に感謝し焼酎だけでなく、つけ揚げやきびなこの一夜干しなど焼酎の肴も添えてお供えするようになりました。

ある日、当主が焼酎造りに使うお米をたくわえている米倉のお米が食べられていることに気づきました。次の日もまたお米が食べられていました。

当主は、夜こっそりと米倉をのぞいて見ました。

すると、ねずみたちが、お米を食べているのです。

ちゅう、ちゅう、ちゅうと喜んでいるようでした。当主は、犯人はねずみだったのかと、ここは見えて見ぬふりをして、そのままにしました。

ねずみたちは、毎日おいしいお米を食

べることができました。

ある夜、当主の寝ている母屋の戸をたたく音が聞こえてきました。

誰か何かを知らせているように思えた当主は、あわてて戸を開けるとねずみたちが、戸をたたいているのです。

ちゅう、ちゅう、ちゅうと何かを知らせているようでした。

すると母屋の台所から火の手が上

がっていたのです。

煙が立ちこめ、火の回りが早く近づ

くことができません。

当主は、急いで家族をおこして、逃げるよう伝えました。

当主は、どうしても逃げられずにいました。大事な母屋や焼酎蔵を守りたかつたのです。

自分の命を顧みず、桶で何度も水をかけましたが、とても火を消すことは、

できませんでした。

すると、どうした

ことでしよう、申木野山の木々が、大きくざわめきたし、母屋の庭の大きな木も揺らぎ始めたかと思うと、雲行きが怪しくなり、雷鳴が響き、それとともに、洪水のごとく大雨が降り注ぎました。

その雨水で、たちまち台所の火は消えたのでした。

当主は、驚きました。そして、いったい何が起ったのか理解できませんでした。

どうして雨が降ってきたのか、不思議

なことが、起ったものだ当主は、考えていました。

ただ、母屋と焼酎蔵が無事で安心しました。

当主は、ねずみたちに感謝し、お米をずつと食べさせました。

ある日、当主が出来た焼酎を持って申木野山にお供えに行くと、いつもの場所が、水浸しになっているのです。当主は、天狗が降りてきて、雨をもたらし火事を消してくれたことに気づきました。天狗が必死に焼酎蔵を守ってくれたのだと感じ涙が止まりませんでした。

それからというもの白石屋では、焼酎の名前を申木野山の天狗と薩摩を代表する桜島山から「天狗櫻」と名付けました。

出来た焼酎は、申木野山の天狗に味をみてもらい、ねずみたちには、お米を食べさせることが、代々続きました。

そして、その天狗の話は、全国に広まり天狗の選んだ酒は、売れるという噂話になるほどでした。江戸の居酒屋では、天狗が選んだ酒とうたい、たいそう繁盛し、次々にお店を増やし、屋号を「天狗酒場」としたお店もでるほど、この話は広まりました。

白石屋も小さいながら、まじめに焼酎を造り続け、たいそう繁盛し、いつまでも幸せに暮らしたということです。

